



遠くなるばかりの安全性確保

原村政樹監督によるドキュメンタリー映画『食の安全を守る人々』のロードショーが封切りとなった。プロデューサーは弁護士で元農水大臣の山田正彦氏。昨年、日本映画復興奨励賞を受賞した『タネは誰のもの』に続く、原村監督と山田氏との二人三脚による食の安全性確保の重要性を訴える映画の第二作となる▼山田氏は日本国内はもとより、アメリカ、韓国にも足を運んで、食の安全を守るために戦っている人たちへのインタビューを積み重ね、これをつうじて食の安全を脅かしている根源、仕組等を浮かび上がらせていく。既に山田氏の著作『売り渡される食の安全』（角川新書）で詳細なレポートが行われているが、あらためて映画の持つ力、説得力を感じられる▼特に目に焼き付いて離れないのが、末期の悪性リンパ腫と診断されたカリフォルニア州在住の男性へのインタビューである。がんを発病した原因は除草剤ラウンドアップにあるとして、モンサントを相手に訴えたもので、320億円もの損害命令を勝ち取り、その後の同様の裁判でモンサント敗訴の流れをもたらす口火ともなった。その男性が見せてくれた何とも痛ましい両腕と、その巨額の賠償金支払いの理由となった、モンサントはラウンドアップが発がん性を帯びる可能性があることを知りながら、これを隠蔽していたという事実には驚かされるばかりだ▼みどり戦略では、2050年までに化学農薬の使用量50%低減をうたっているが、これを「ネオニコチノイド系を含む従来の殺虫剤に代わる新規農薬等開発」によって実現するとしている。イノベーション頼りになるほどに、食の安全性確保は人手に委ねるしかなくなることを本映画は示唆してもいる。人の犠牲によってしか確認できないような安全性確保は願ひ下げだ。

(土着菌)